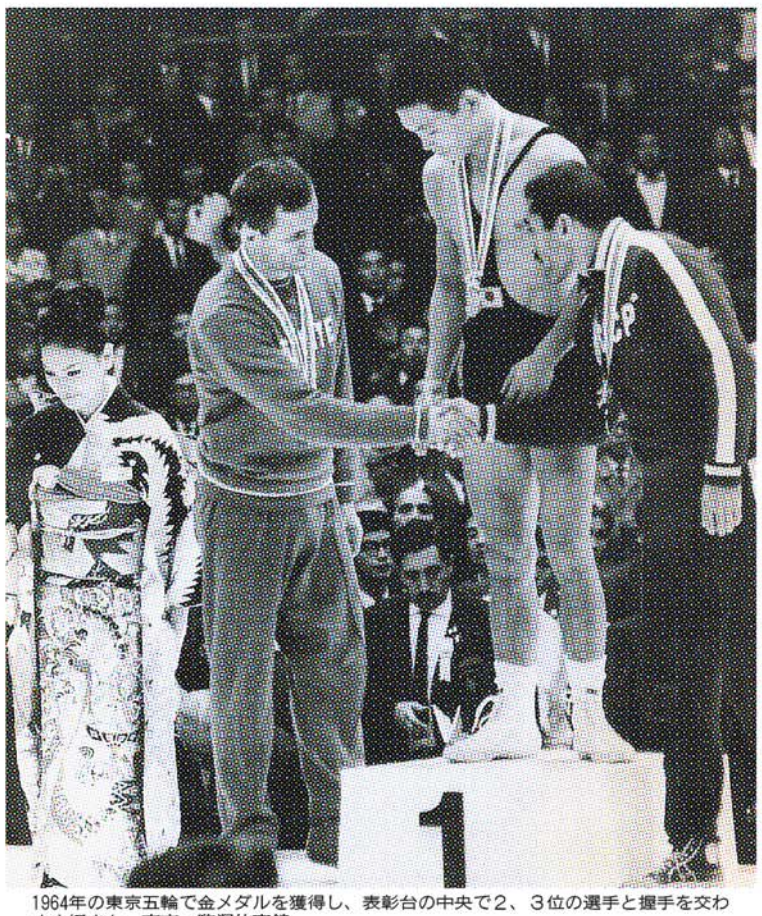
「無心一途」頂点指せ

1964年東京五輪で日本選手が獲得した金メダルは16個。このうち唯一の本県在住者が、レスリングのフリースタイル・バンタム級優勝の小幡洋次郎さん（70）＝旧姓上武、足利市在住＝だ。現在も後進の指導に情熱を注ぐ「英雄」に、今回の五輪開催決定の喜びと自身が世界の頂点に立った64年東京五輪の思い出を聞いた。（桜井誠）

後進の指導に情熱

64年東京 レスリング「金」 小幡さん（足利在住）


1964年の東京五輪で金メダルを獲得し、表彰台の中央で2、3位の選手と握手を交わす小幡さん＝東京・駒沢体育館

―ついに2020年東京開催が決まりました。

「『（64年の）東京五輪に出たい』と練習に励んでいたころを思い出しますね。元選手ようと全力を尽くすだけ』という考えですが、各競技の今後の普及発展を考えると、この五輪開催は間違いなくプラスになります」

―64年東京五輪は圧倒的な強さでした。

「国内予選から相手に1ポイントも取らせずに世界の頂点に立ちました。試合で気持ちが高ぶっても、重圧や緊張を感じることがなかったのがありました」

―現在、コーチを務める母校・館林高（群馬）からも7年後に五輪出場選手が生まれるかもしれませんね。

「結婚して足利市に移り住んで以来、30年間仕事に専念していました。4年前、OB会長となって母校の外部コーチにも復帰しました。選手たちは『無心一途』の気持ちでレスリングに打ち込んでほしい。世界に羽ばたく選手が出てきてくれればうれしいですね」

おばた・ようじろう　旧姓上武。群馬県邑楽町出身。館林高―早大―オクラホマ州立大（米国）。レスリングのフリースタイル・バンタム級の選手として、1964年東京大会、68年メキシコ大会を連覇。結婚を機に足利市へ移り住む。同市内のニューミヤコホテル会長。70歳。

―64年東京五輪は圧倒的な強さでした。胸を張れるだけの練習をしていたからこそ、本番では緊張もしませんでしたし、浮足立つこともありませんでした」

―選手として見た64年東京五輪の盛り上がりはいかがでしたか。

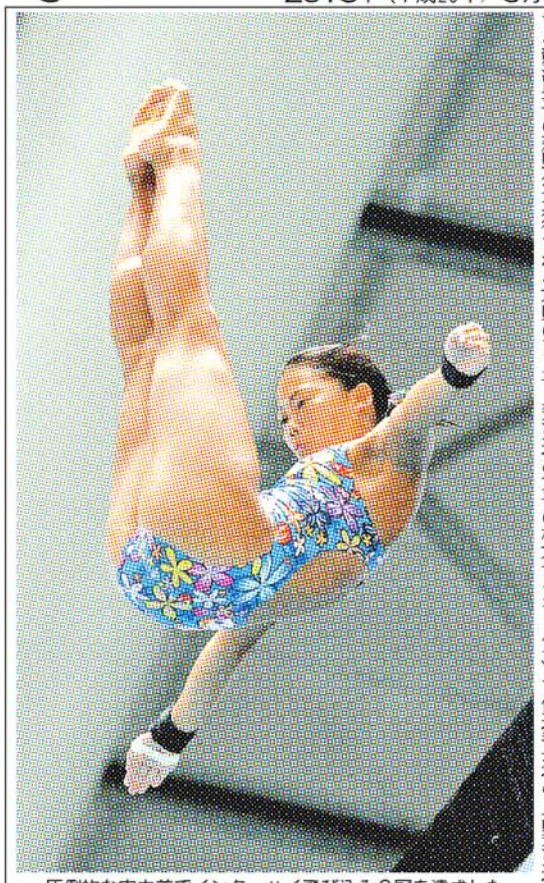
「現在の代々木公園にあった選手村に滞在していて、世の中の盛り上がりを肌で感じる機会はあまりなかったですね。ただ高度経済成長期と相まって、日本が五輪で一丸となっている活気はすごいものがありました」

―現在、コーチを務める母校・館林高（群馬）からも7年後に五輪出場選手が生まれるかもしれませんね。

「結婚して足利市に移り住んで以来、30年間仕事に専念していました。4年前、OB会長となって母校の外部コーチにも復帰しました。選手たちは『無心一途』の気持ちでレスリングに打ち込んでほしい。世界に羽ばたく選手が出てきてくれればうれしいですね」

榎本、高藤、海老沼、橋本…

本県選手 逸材ずらり


圧倒的な実力差でインターハイ飛び込み2冠を達成した榎本。東京五輪に向け、一層の「飛躍」が期待される＝2013年8月、福岡県立総合プール

7年後に開催される東京五輪。4面で紹介するほかにも、出場が期待される本県のアスリートはめじろ押しだ。

飛び込み女子の榎本遼香（作新高）は、今年の全国高校総体（インターハイ）で他選手とは次元の違う高難度の試技を連発し板飛び込み、高飛び込みの2冠を達成。順調に成長すれば、「女王」として大舞台に出場する可能性が高そうだ。

高藤　直寿

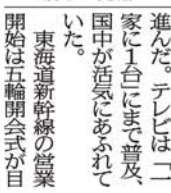
柔道は有望選手がずらりと並ぶ。世界選手権男子60キロ級で初出場優勝を飾った高藤直寿（下野市出身、東海大）は現在20歳。日本一になる前に世界一の称号を手にし、国際舞台での勝負強さは頼もしい。東京でも「金候補」の一員に数えられそうだ。

海老沼　匡

同選手権66キロ級で連覇した、ロンドン五輪銅メダリストの海老沼匡（小山市出身、パーク24）は7年後には30歳となり、円熟味を増して東京を迎える。

昨年のインターハイ60キロ級王者・田中崇晃（白鴎足利高―筑波大）、同100キロ超級王者・横山晃世（国学栃木高―国学大）、今年の全国中学大会90キロ級を制した長島立弥（足利一中）ら若手の成長にも楽しみが膨らむ。

卓球男子では、JOCエリートアカデミーの第1期生として技を磨いている益子町出身の東勇渡（東京・帝京高）に注目。陸上は今年のインターハイで男子走り高跳びを制した中島大輔（佐野日大高）らに期待したい。バスケットボール男子は、既に日本代表に名を連ねているセンター橋本晃佑（宇工高―東海大）が、選手としてのピークを迎えるころか。


橋本　晃佑

サッカー女子U17、U19日本代表の井上綾香（さくら清修高出、仙台）も「なでしこジャパン」の一員に名乗りを上げたい。このほか競泳や自転車、ボクシングなどでも、次代を担う逸材が「東京五輪切符」を狙っている。

1964年東京五輪の金メダリスト

ボクシング	バンタム級	桜井　孝雄
バレーボール	女子	
体操 男子	団体総合	小野　喬 遠藤　幸雄 鶴見　修治 山下　治広 早田　卓次 三栗　崇
	個人総合	遠藤　幸雄
	種目別つり輪	早田　卓次
	種目別跳馬	山下　治広
	種目別平行棒	遠藤　幸雄
レスリング フリースタイル	フライ級	吉田　義勝
	バンタム級	上武洋次郎
	フェザー級	渡辺　長武
グレコローマンスタイル	フライ級	花原　勉
	バンタム級	市口　政光
重量挙げ	フェザー級	三宅　義信
柔道	軽量級	中谷　雄英
	中量級	岡野　功
	重量級	猪熊　功

※レスリングなどの階級は当時

64年の世相

東海道新幹線が開業

高度成長期、国中に活気

1964年の日本は前に迫った10月1日。突き抜けるような青空の下、東京五輪が開幕。翌日の本紙1面には「花やかに地上最大の祭典」の見出しが躍った。開会式会場の国立競技場には8万人の観衆が詰め掛け、アジアで初となる世界最大のスポーツイベントに気持ちを高ぶらせた。

開会式のクライマックスを彩ったのは、ギリシャから10万人の若者によって運ばれた聖火。この日、最終走者・坂井義則さんによって国立競技場へと運ばれた〝平和の火〟は、バックスタンド最上部の聖火台に点火され、大きな炎となって燃え上がった。

その聖火が本県に入ったのは同9月30日。福島県から本県へと引き継がれ、その後2日間にわたって五輪開催に沸く県内を南下した。翌10月1日には那須町から宇都宮市までを本県の若者らがリレー。県庁には同日午後1時40分、正走者の野中克也さんらが聖火を掲げて到着し、大群衆の歓声と拍手がわき起こった。

競技は開会式翌日から始まり、20競技16種目に本県関係で日の丸を背負い夢舞台へ挑んだのは5競技5選手。女子バレーボールの半田百合子（栃女高―日紡貝塚）、陸上男子3000メートル障害の奥沢善二（佐野高―東洋大）、ボートかじなしペアの黒崎紀正（宇都宮高―東京医科歯科大）、クレー射撃の石下年安（大谷石材）の4選手と、後に足利市へ移り住むレスリングフリースタイル・バンタム級の小幡洋次郎（旧姓上武、オクラホマ州立大）だった。

半田はソ連との決勝を制し、金メダルを獲得。回転レシーブを駆使し長身選手そろいのソ連に勝利した女子バレーチームは、今も「東洋の魔女」として語り継がれる。また当時、米国の名門大学で技を磨いていた小幡も、他を寄せ付けない強さで一気に世界の頂点へと駆け上がった。（桜井誠）

大田原市野崎地区を快走する聖火ランナー。沿道は日の丸を手にした人たちであふれた＝1964年10月1日

金は2480円（東京～新大阪）。

東京都内ではラーメン1杯60円で食べられた。

大卒初任給は1万9750円（63年調査）の時代だった。

日本初の高速道路となった名神高速がほぼ全線で開通。首都高速は五輪の開幕直前に羽田空港からオリンピック会場のある代々木周辺までつながり、東京・銀座のみゆき通りに集まる若者は「みゆき族」と呼ばれて社会現象に。

白黒テレビの普及率は約9割にまで拡大。「東洋の魔女」と呼ばれた日本チームがソ連を破ったバレーボール女子決勝の平均視聴率は66・8％を記録し、多くの人がテレビにかじりついた。

NHKでは人形劇「ひょっこりひょうたん島」の放送が始まった。「かっぱえびせん」が発売され、観光目的の海外渡航も自由化された。

大阪を4時間で結び「夢の超特急」ともてはやされた。当時の料金は100円で、タクシーの初乗りは100円で、たばこのゴールデンバットが1箱30円。大卒

64年五輪 県勢5選手が出場

県庁に聖火、県民熱狂

聖火が県庁広場に到着すると、オレンジ色の聖火を一目見ようと県庁前も屋上までも人で埋め尽くされた＝1964年10月1日午後1時40分